

東日本大震災復興支援情報

●奇跡の一本松

郡山貴三(東京都)



東日本大震災において被災された皆様には心からお見舞い申し上げます。

被災地に入ったのは、6月11日の朝の早い時間でした。そこは人のいないガレキの山の町でした。鉄道の線路は、ずたずたに寸断され、駅はありませんでした。橋の上に立つと、遠くに一本の松が立っているのが見えました。

陸前高田市の奇跡の一本松、私は無性にこの松に逢いたくて夜中の高速を飛ばして来てしまった。彼はすうっと立っていた。朝日を背面に浴びて静かにすうっと立っていた。写真を撮った、撮れてほっとした。

陸前高田のほんの少し手前に矢作温泉鈴木旅館と書いた宿があった。ふだんは湯治客でにぎわう一軒宿で奇跡的に被災は受けなかった。旅館の回りは全国から来た車でうまっていた。各県警のおまわりさん、ボランティア、ガレキ処理の職人さんなどで部屋は満杯だった。風呂に入りたい一心で聞いてみた。「部屋空いていますか」。無謀だった。このアホ、いまごろ何しに来たんだ。突っ返されるのが当然だった。返ってきた答えは「遠くから来てくれたんですね、ありがとう。娘の部屋を空けるから泊って行ってくださいね」「食事がなくてごめんなさい、でも温泉だから風呂はいつでも入れますよ」。

東北人の大きな魂を感じた一瞬だった。必ず被災地は復興出来ると確信した一瞬でもあった。

●「3.11プロジェクト」とは— 管洋志(東京都)

突然やってきた災害。被災者のこころの奥に秘める、失望や悲しみは、測り知ることは出来ない。家を失い、家族を失った方々は日々の暮らしを立て直し、わずかな光に希望を託し、家族や隣人と

の絆を大切に生き抜いている。こういった姿は、人間として、頼もしくまた、眩しいばかりだ。生かされた命を大切に生活してゆく力は限りない。この努力と底力をもって、東北はきっと蘇るに違いないと僕は信じる。

被災現場に立ち、肉声に耳を傾け、自分の眼で確かめ、写真家は、これから何をすればいいか問うた。「写真で何を表現できるのか…」そこで、淡い思いに火がついた。希望に向かって生き抜く姿を、被災地に向かったJPS会員及び被災地に住む写真家と共に、近い将来、遠い未来に向け語り継がれる写真展、写真集出版を企画しようと決意した。5月末から練り上げていった計画は、無謀とも思える程急を要するもので、震災1年後に発表にこぎつけた。といった考えは、ゆるぎないものとなって…すでに5カ月を費やした。

この準備の中で、被災者と会い、電話で語り、メールの交換をしている中で学んだことがある。「人への愛、人を思いやるこころや感情を大切にしながら日々の生活を送ることの大切さ、これは人間として生きる原点ではないか」ということを気付かされた。

事態に涙してはならない。真摯に物事を見つめ、奥に秘める事実、真実を据え記録してゆくことが、写真家としての責務であろう。

協会に自らプロデュースする立場を希望し、「3・11プロジェクト」を立ち上げた。スタッフは、僕を含め6名、少人数であるが、意思統一は、しっかりと確立した。残る4カ月間にエネルギーを出し切る覚悟で臨む。是非、会員各位の理解と協力を得て、協会事業復興支援第3弾のプロジェクトの写真展及び写真集出版を成功させたい。

●言葉の重み

今村拓馬(東京都)



「また来るよ」の言葉に「もう来ないでしょ」とサラリと言った女の子がいた。

私は断続的に陸前高田に通い、取材活動の傍らでNPOと協力をして小学校で写真教室を開催している。冒頭の言葉は、授業の終わりの一幕だ。これまでどれだけ多くの人が訪れ、無責任にまた来ると言い続けたことだろうか。そして、この言葉は再訪した人が皆無である事実を物語っている。

大人にとって社交辞令として、何気に言った一言かもしれないが、言葉の力は重い。子どもたちは、共有した時間が楽しければ楽しいほど「また来るよ」の言葉に期待を持つ。

私はまた来ると言ったら、それは守る。「また来るんでしょ」「また来た」と言われる位に通い、撮影するしないに関わらず顔を出し続けているが、出来ないなら「また来る」なんて言わない。それは当然のことだ。

●再起への覚悟

宮嶋茂樹(東京都)

この地に立って、初めて写真家になったことを後悔した。我らは東北では無力であった。助けを求める人に手を差し伸べることもできない。水を、食料を、燃料を待つ人にそれを届けるどころか、東北で我らが消費したのである。

そして、どんな優秀な写真家の手にかかっても、この

広大な地獄を、無慈悲な殺戮を表現できないのである。我ら職業写真家にできることは、この未曾有の災いを各々が記録し、東北の民が、日本人がいかにこの戦後最悪の困難に立ち向かい、それを克服していったかを表現することである。ただでさ



新居はなくなっても後継ぎがいる

子は父の背中を見て育つ。家族皆生きているだけでもめっけもんや。しかし、この若さで一國一城の主になったのである。城を構えるには人に言えぬ苦勞もあったろう。その無念を、前よりもっと幸せな家庭を築く糧にしていきたい。

え日本人は熱しやすく、冷めやすい。次に必ずやってくる災いに備えるためにも、日本人皆が東北の悲劇と無念を忘れぬためにも、共に茨の道歩む覚悟を喚起することである。

そして、3.11から早や8カ月、今だ現場に立たれたことのない会員はおられんと存ずるが、これからの我らのなすべきことは職業写真家として培った能力、技術を生かし、絶望を記録するだけでなく、被災地に、日本に希望をもたらすことである。

●「必ず復興します」の言葉に希望が見えた

榎並悦子(東京都)



変わり果てた我が街を見降ろす気仙沼の人々

私が気仙沼を訪れたのは、震災から2週間余りが過ぎた時期だった。知人の娘さんがアトピーで、食料に困っていると聞き、東京の専門店で購入した食品を手に入れて災害支援車両扱いの深夜バスに乗り込んだ。明朝、仙台に到着。さらにバスを2度乗り継いで、一関経由で気仙沼に辿り着いた。

駅前から街中に入るにつれ、次第に震災が実感として伝わってきた。そして海を望む高台に登ったとき、目の前に広がる光景に愕然とした。何艘もの大型船舶や漂流物が住居や水産加工の工場を押しつぶし、さらに発生した火災で、あたり一面が焼け野原ようになっていたのだ。奇しくも昨年、気仙沼に一泊し、街を歩いただけに、その変わり果てた姿は、信じがたかった。その後取材した陸前高田や南三陸町も、その被害の甚大さに立ちすくむのみだった。

震災後、4度目の気仙沼では、被災された水産加工業の方から、復興に向けてのお話を伺うことができた。復興への動きに期待と共に、長期的な支援の大切さを痛切に感じた。

「東日本大震災復興支援情報」の掲載記事を募集しています。文字450字と写真1枚を総務までお寄せ下さい。